

今こそギリシャへ！

# ギリシャの船社セレスティアルで満喫する 憧れのエーゲ海クルーズ

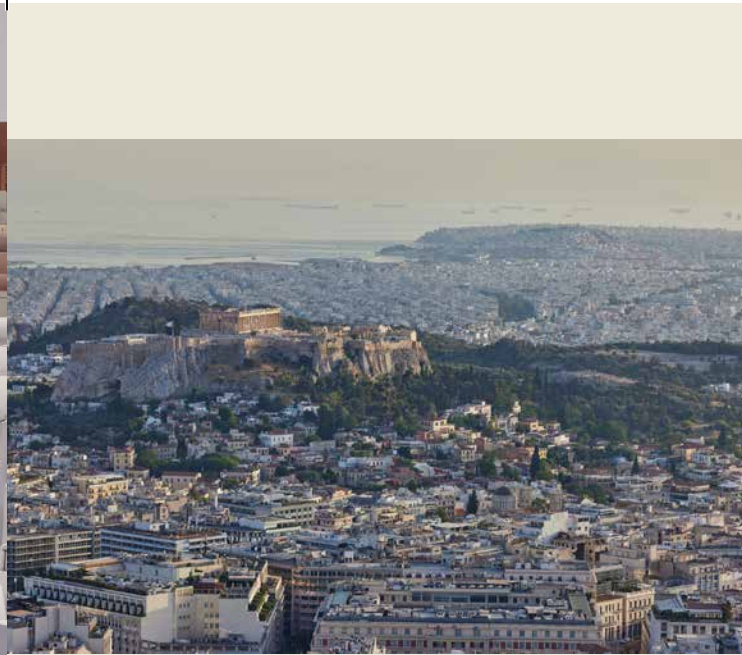
エーゲ海は世界の誰もが知るクルーズのメッカだ。  
ギリシャ神話の神々が今も息づくこの海を船で航行したいと長いこと願っていた。  
2024年は日本とギリシャの文化観光年そして外交関係樹立125周年である。  
この記念すべき年に、ギリシャのクルーズ船「セレスティアル・ジャーニー」で  
エーゲ海の島々をめぐる機会に恵まれた。

写真=田村浩章 文=冨永真奈美

パルテノン神殿は古代ギリシャのドーリア式とイオニア式建築様式が融合した建造物だ。ペンテリコン産の白大理石で造られ、正面に8本、側面に17本の柱を持つ周柱式の構造である。人間の目に見えよう、隣の柱を太くするなど視覚補正を施し、視覚芸術としての価値を究極まで高めたモニュメントである



建物の塗装に青と白を使用することが法制化されたのは1970年代。エーゲ海に映える青と白のサントリーニカラーは、この島を世界有数の観光地足らしめる要因となった



右：白とブルーの鮮やかなツートンカラー。どこにいても一目でセレスティアル・ジャーニーだと分かるその姿は、乗客に大きな安心感を与えてくれる  
左：リカビトスの丘から望むアテネ市街とアクロポリス。遠方にはエーゲ海に開けたピレウス港を臨む。夕陽に染まる街並みから、古代と現代が交錯する美しさを感じられる

乗船日の前日、アテネに入りパルテノン神殿を訪れた。いつもより早く厳しい暑さが訪れていたが、神殿ある丘の頂上は古代ギリシャ建築と美術の最高傑作を見ようとする観光客で埋め尽くされている。「ギリシャの栄華と権威を象徴する遺跡だよ」と、隣のギリシャ人は誇らしげに言う。

ギリシャはかつて地中海貿易の中心地として、東西南北の異文化から影響を受けてきた。だからだろうか、サフラン色の太陽で褐色に染まった白壁の様子も相まって、タクシーから見えるアテネの街並みは、どこか混沌としたエキゾチックな魅力にあふれている。そこに突如として浮かび上がったのは目にも鮮やかな白とコバルトブルー。ピレウス港に停泊する「セレスティアル・ジャーニー」だ。これからめぐるエーゲ海を思わせる圧倒的なウォータージェットイメージに高揚感が湧いてくる。

さっそく乗船し船内を散策した。そこにもエーゲ海の世界観がはつきりと表れている。フロアや壁面は主にブルーと濃紺色。波や貝殻を思わせる流線形や、ギリシャ芸術の象徴とされるメアンドロス模様がふんだんにあしらわれている。

青空を見晴らすブルドッキはすでに乗客で一杯だ。みなドリンクを片手に水着でデッキチェアに寝そべり「ハロー！」と陽気に声をかけてくれる。筆者もさっそく仲間に加わり、ブズーキ（ギリシャの弦楽器）で奏でられるギリシャ音楽を聞きながら出港シーンを楽しんだ。

### ギリシャの船だからこそめぐる美島の数々

セレスティアル・ジャーニーのエーゲ海クルーズでは、アテネやテッサロニキなどの大都市やクレタ島の他、キクラデス諸島の島々をめぐる。サントリーニやミコノスはもちろん、ミロスといった隠れた美島にも行けるのがギリシャの船ならではの醍醐味だ。島めぐりの皮切りとなるクレタ島（イラクリオン港）に船が到着した。ギリシャ神話とのゆかりが深いこの島で、オリンポスの最高神ゼウスが生まれその子孫がクレタ文明を築いたとされている。16世紀のベネチア時代に現在の形となったクルス要塞はクレタ名所のひとつ。散歩がてら訪ねてみることにした。要塞は海賊来襲に備えた堅牢な石造りだが、ベネチア様式ならで

はの優雅さも感じられる。要塞への堤防はすでに観光客であふれ、「地下に財宝が隠されていて、探そうとしたら不幸を招くらしいよ（笑）」と隣にいた観光客が教えてくれた。このように、現実と虚構が入り混じった神秘的な言い伝えがエーゲ海には数多く存在する。それがエーゲ海の魅力を一層引き立てているのだろうと思えた。

その夕刻、海賊と財宝へのオマージュとばかりに、船のオリジナルカクテル「Pirates Comfort（海賊のお楽しみ）」を注文することに。宝箱に取められたこのカクテルに「すごい！」と周りの乗客も注目し、なんだか人気者になった気がした。



クルス要塞はイラクリオン港から海を右手に見つて徒歩で約10分圏内にある。入場見学(有料)も可能で、イラクリオンの歴史に関する展示などが楽しめる

翌朝、船はサントリーニ島に着いた。前方にそびえ立つ断崖絶壁は、紀元前17世紀に起こった火山大噴火によって島の中心が陥没し形成されたものだ。クルーズ船なら麓から断崖絶壁を仰望でき、その険しくも神々しい風景を拝むことができる。

### これぞエーゲ海！その美しい景観を堪能する毎日

そうした自然もさることながら、サントリーニといえば青い屋根の教会と白い壁のおしゃれな街並みが有名だ。そこで人気の街イアを訪れることに。イアのメイン・マーケット・ストリートにはカフェやショップが並び、すでに大勢の観光客が散策を楽しんでいる。細い小道を折れると、その先に目当ての青い屋根が見え、さらにその向こうにはエーゲ海が広がっていた。これまでも何度か見た「これぞサントリーニ！」ともいうべき風景だ。隣にいたカップルは「他の青い屋根も見に行こう！」と手をつないで歩き去った。島には大小約600もの教会があり、その内約6割の屋根が青で彩られているという。青い屋根を訪ね歩くのも一興かもしれない。



ブロンズがかかった青色の海にも映えるセレスティアル・ジャーニー



ギリシャの島々には猫が多い。共通点は人懐っこいこと



断崖絶壁は海拔約300メートル。その頂上から見えるのは、火山大噴火で形成されたカルデラ湾にクルーズ船が浮かぶ風景だ



1 自然の洞窟を丁寧に整備し、美観と実用性を兼ね備えたワイナリーを作り上げた。コンスタンタキス家の歴史を示すワインボトルや写真なども展示されている  
2 山々に囲まれたブドウ畑には、アシルティコやモネンヴァシアなどのブドウが植わっている。トマトなどの野菜を栽培する区画もある 3 オーナー家族のペトロスさんのリードでワインテイスティングを楽しむ。ペトロスさんの説明はとて丁寧で分かりやすい 4 プールデッキは一日中日光浴を楽しむ乗客で賑わう。炎天下とも感じられる中、熱心に読書する乗客もあり、太陽を愛する欧米人の気風が伝わって来た



客室のテラスでウェルカムワインとピザのランチを。ピザなどのスナックは有料のルームサービスで注文できる

翌日、最後の寄港地ミロス島に到着した。ここになつたひとつだけワイナリーがあると聞き訪れることに。この島は洞窟の自然美を堪能できる場所が多く、タクシード向かう際パパラガス洞窟という人気のビーチも見ることができた。

### ミロスの洞窟ワイナリーでワインを楽しむ

ミロス島の洞窟ワイナリーでワインを楽しむ。この島は洞窟の自然美を堪能できる場所が多く、タクシード向かう際パパラガス洞窟という人気のビーチも見ることができた。

### ギリシャの恵みと旨みが満載の船上ライフ

このように寄港地での体験もさることながら、船上で過ごす日々もまた格別だ。ギリシャの船でクルーズするとはこういうことか、とワクワクさせられる毎日だった。ビュッフェレストラン「タベル



ミコノスの街並みは、青と白の他、緑、黄、赤などとてもカラフルだ



セント・ニコラス教会ではギリシャ正教会の伝統的装飾が見られる



パラポルティアニ教会の魅力は屋根などに見られる不規則な形状だ

夕方、断崖絶壁の頂上にあるカフェで、世界最高と言われるサントリーニの白ワインからアシルティコを選び飲んでくつろいだ。ついつい長居してもセレスティアルなら大丈夫。どの船よりも遅く出港するので、ケーブルカーが混雑する時間を避けてゆっくり帰船で

きるからだ。他の船が1隻また1隻と去っていく中、セレスティアル・ジャーニーだけがいつまでも私たちの帰りを待っていてくれた。この日のドレスコードはサントリーニカラーの「白と青」で、皆白や青を取り入れ気軽におしゃれを楽しんでいる。筆者はブルーのワンピースを着てディナーやデイスコダンスにいそしんだ。

翌日の寄港地はミコノス島である。この日はテンダーボートで観光名所の集まるミコノスタウンへ直行できるというからラッキーだ。まずはキクラデス建築様式の象徴ともいえる、セント・ニコラス教会とパラポルティアニ教会を訪れた。エーゲ海をバックに浮かび上がる白壁と曲線的なシルエットに見惚れてしまう。その後はリトルヴェニスの上レストランへ。海沿いに並ぶレストランに入り、あの世界の誰もが知っている「カト・ミリの風車」を眺めるためだ。食事時を外した時間なのですんなりと海上に張り出したテラスへ案内され、はたして、あの6つの風車が3D映像のような存在感で目に飛び込んできた！まさにかぶりつき、しかもほとんど貸し切り状態で絶景を楽しんだ。

アノ・ミリの丘にある風車から、カト・ミリの6基の風車をしてエーゲ海を見渡す。ミコノス島ではかつて風車で小麦や大麦を挽いていた。現在も残る16基の風車を巡ってみるのもおもしろい



夕刻船に帰ると、これから船主催のディナーツアーへ出かける顔見知りの乗客とすれ違った。水上レストランにも行くという。「日中の風車の写真を送るね」と言うのと、「じゃあ夜バージョンを送るね！」と約束してくれた。

### 木漏れ日が美しいテラスでは

ビジター達がさまざまなワインを楽しんでいる。筆者も加わり、モネンヴァシア（別名マルヴァジア）というエーゲ海原産のブドウで造られた白ワインを飲んだ。穏やかな酸味と果実味がのどに心地よい。「ワインはミロスの外に出さないのですよ」とオーナー家族のペトロスさんは言う。そう聞くと、ちょっととした隠れ家感もあって一層おいしさが増した。その後ブドウ畑も見学し、ワイン造りの起源が古代とされるこのミロスでワイン文化にふれる興味深い時間となった。



右:ソムリエ歴34年のアフメドさんをワインショップ「グレーブ・ヴァイン」で撮影。「まずはアシルティコやクシノマブロをぜひ飲んで」と教えてくれた  
左:マルチーニ・ピアノバー&ラウンジは船の中心的な場所だ。演奏などが行われる時間は混雑するので、早めに訪れてカクテルを飲みながら待つとよい

右:青とゴールドを基調とした3層吹き抜けのアトリウム。床の模様や波打つ手すり天井の大鏡に映り込み、アトリウム全体に煌めく多層感が生まれている  
左:「タラッサ」は太陽とゴールドを彷彿とさせるメインダイニングだ。通常のアラカルトメニューの他、ステーキなどの有料メニューも常時用意されている



1 ギリシャ風ハガキづくりの講師ダニエルさん 2 アーゼリスさん(ホテルマネージャー)は「真心のおもてなしが要」と語る 3 テレーザさん(クルーズディレクター)は頼れる万能エンターテイナーだ 4 日本に留学経験のあるアナ・メリズさんは歌手とダンス講師も務める 5 「エル・グレコ」の奏でるメロディはギリシャ気分を盛り上げる



エグゼクティブシェフのアランさん。「日本の蕎麦が大好きです」と微笑む



ピンク・ムーン(有料、要予約)では麺類などのアジア料理が楽しめる。葛飾北斎を思わせる絵も必見だ



グリル・シーカース(有料、要予約)では肉やシーフードのグリル料理が楽しめる。サーロインステーキはジュースでボリュームたっぷり

そしてさすががワイン造り約500年の歴史を持つギリシャの船、ワインの充実ぶりがすごい。「タベルナ」ではギリシャの居酒屋風に、赤白泡ロゼから順番問わず何でも選んで好きな料理と共に気軽に味わう。その一方、「タラッサ」で待っているのはより洗練された体験だ。ワインリストにはクシノマブロやアギオルギティコ、マラグジアやモスホフィレロなどギリシャの固有ブドウ品種で造られた美味なワインが揃い、ワイン



ワインやカクテルが豊富に揃う。パッケージサービスを活用して数多く試したい



「ホライズン・ラウンジ」から見えるエーゲ海は情緒たっぷり



ギリシャ名物「ギロス(チキン)」をマルガリータとともに



ムサカやサガナキなどのギリシャ料理はもちろん、欧風料理、新鮮な果物や野菜、デザート、そしてフルーツジュースなどが楽しめる。エーゲ海の見ながら味わうと一層美味しい

「大船」に乗ったような安心感があった。デイリープログラムも盛りだくさんだ。ギリシャクッキングデモや日本のオリガミクラスなど、見

スチュワード(ソムリエ)の助けを得て料理に合うボトルを選ぶことができる。カヴァマスター(チーフソムリエ)のアフメドさんは「ギリシャワインの魅力は多様な固有品種と独自性あふれる風味です。この船でギリシャワインを飲むと、ずっとギリシャワインだけに飲み続けるお客様は多いのですよ」と胸を張る。もちろんシャルドネなどの国際品種のギリシャワインや、フランスやイタリアといった世界各地のワインもあるので飲み比べてみるのも一興だ。そして完全アウエーのエーゲ海クルーズかと思っていたら、日本人へのサービスも手厚かった! 10カ国語対応のディナーメニューにはなんと日本語も。日本人は美食への意識が高いとされ、乗客数もコロナ後回復傾向にあり唯一のアジア言語として選ばれたという(24年度推定3200人、コロナ前は5232人)。アナ・メリズさんと一緒に日本語堪能なインターナショナルホステスもいて、まさに「大船」に乗ったような安心感があった。

ナ(ギリシャ風居酒屋を意味する)ではギリシャの恵みがいっつも楽しめる。オリブ、フェタチーズ、グreekヨーグルト……エーゲ海地域独特の気候で育まれた野菜や果物は搾りたてジュースやサラダなどに形を変えて供される。世界最高品質と謳われるギリシャ産オリブオイルを毎日食べたおかげで肌がうるつるになった気がした! アラカルトレストラン「タラッサ」(海を意味するギリシャ語)のメニューもギリシャの船ならではの。広く欧風料理やムサカなどのギリシャ料理はもちろん、長寿で有名なエーゲ海のイカリア島に発想を得た料理も提供される。例えば野菜やハーブを詰めたパイなどのヘルシーな一品が選べるのだ。エグゼクティブシェフのアランさんはこう語る。「新鮮な食材そして良質なハーブやスパイスを使うことが大事です。オリブオイルをふんだんに使った家庭的なスタイルがギリシャ料理の特徴ですね」。その通り、どの料理もフレッシュかつ滋味深いおいしさだ。ベジタリアンやヴィーガンメニューもあり世界的な食の傾向にも配慮している。



オリオンの12神をテーマにした「ミソロギア」。ダンススクールで本格的に学んだダンサーが多く、見応えたっぷりのショーだ。キューバやカナダを含む多国籍なクリエイティブチームによって演出やプロデュースが行われている



取材メモ

Idyllic Aegean - 7 Nights

日程: 2024年6月8日(土)~6月15日(土)  
 コース: アテネ~テッサロニキ~クサダシ~  
 クレタ~サントリーニ~ミコノス~ミロス  
 (取材はクサダシを除く。全ルート乗船する  
 ことを条件として、アテネ、テッサロニキ、ク  
 サダシ、クレタで乗下船が可能。毎週土曜  
 日出港・帰港)  
 クルーズ料金: \$919~  
 (\*参考料金、変動制)  
 船名: セレスティアル・ジャーニー  
 (セレスティアル・クルーズ)  
 総トン数: 5万5819トン  
 全長: 219メートル  
 乗客定員: 1260人/乗組員数: 630人  
 セレスティアル・クルーズ  
<https://celestyal.com/>

取材協力

ギリシャ大使館(在京)  
 ギリシャ政府観光局(アテネ)  
 セレスティアル・クルーズ

クライマックスは  
ギリシャ神話のミュージカル

日々のハイライトはナイトショ  
ーだ。日を追うごとにショーはど  
んどんギリシャ神話の壮大さを帯  
びていった。最終日前夜のミュ  
ジカルはホメロスの叙事詩「オデ  
ュッセイア」がテーマだ。トロイ

ア戦争の後、故郷のイタケ島に帰  
らんとするオデュッセウスの冒険  
に胸が高鳴った。そして最後の夜  
を飾ったのはオリオンの12神を  
テーマにした「ミソロギア」。ゼ  
ウスやアフロディーテなどの神々  
が生き生きと舞台で舞い、観客か  
ら惜しめない拍手と大喝采が贈ら  
れた。

この最後の夜、船上で仲良くな  
った人々と夜遅くまで飲んで踊っ  
て楽しく語り合った。皆一様にこ  
う言う。「エーゲ海は美食や絶景  
を楽しめるだけではなく、神話や  
文明、長い歴史もあって奥が深い  
よね」。筆者も同感だ。セレステ  
ィアル・ジャーニーのエーゲ海ク  
ルーズは、誰もが憧れ思い描くエ  
ーゲ海クルーズそのものだった。  
きつとまたセレスティアル・ジャ  
ーニーでエーゲ海を楽しもうと心  
に誓った夜となった。